



双子女子大生の 柔肌比べ

伊吹泰郎

挿絵／貞影

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

プロローグ	4
第一章 練習	14
第二章 水着	71
第三章 肛悦	127
第四章 告白	176
第五章 日常	231
エピローグ	282

登場人物

Characters

鈴木瑞穂

(すずもと みずほ)

都内の大学に通う女子大生で、双子の妹。生真面目な少女で、ややきつめの目つきをしているものの根は奥手で純情な性格。

鈴木みのり

(すずもと みのり)

都内の大学に通う女子大生で、双子の姉。享樂的な性格で、直登と瑞穂を色々と振り回す。お芝居上手。

輪島直登

(わじま なおと)

姉妹と同じ大学に通う青年。対照的な姉と妹に惹かれたことから色々と気苦労の絶えない生活を送ることになる。

しかし、一人用の空間に三人もいるのは無理があった。

さつきから直登の脚には、何度もみのりの小さな膝がぶつかっている。腕にも瑞穂の美乳が当たり、若々しい弾力を跳ね返してきていた。

暑さもものすごく、少年は大粒の汗が止まらない。水滴は姉妹の肌にも浮いており、その湿気が牡と牝の体臭を一層強める。個室の中の空気は、すでに重いほどだ。

「ふうん……?」

妹のごまかしをからかうように、みのりが目を細めた。

「じゃあ、直登君とわたしはどれだけ仲良くなれるか、最後まで見届けてね?」
からかうように言い放った彼女は、矛先を少年へ変える。

「直登君、始めましょ?」

「あ……」

高温多湿の中、直登の理性は極端に鈍っていた。海綿体へ滾たぎった血が集まっているのに、勃起を隠す意思さえ湧いてこない。それを一層朦朧とさせるのが、みのりの微笑だ。二つの瞳は謎めいた光を帯びて、まるで催眠術をかけてくるようである。

少年が僅かに後ずさると、みのりは素早く動いた。

床の狭いスペースへ滑り込んで膝立ちになり、トランクス水着を捕らえ。その縁を

いっぱい伸びし、少年の頑健な腿まで一息にズリ下げる。

苦もなく外へ出された。ペニスは、とつくに鋼さながらだった。雄々しく上を向いて、みのりへ見せつけるように根元から揺れている。亀頭も膨らみきってパンパンだ。

「うわ……大きいのね……」

「あ……お……」

賞賛めいた感想に、遅れて生じる少年の羞恥心。どう感じたのか、瑞穂も喉を鳴らして身じろぎする。

それでもみのりはマイペースさを保ち続け、今度は自分の胸の左右へ、両手をあてがった。

瑞穂のものとはほとんど同じ外見の乳房は、中身のクッションめいた柔らかさも、やはりそっくり。圧されてムニユリと潰れ、谷間を格段に深くする。同時にブラのカップは膨らみからズレ、後数ミリ上へ動かすだけで、乳首が見えそう。

「直登君のおちんちん……ここに入れるわね。わたしが気持ちよおくしてあげる……」
知識の乏しい少年にも、みのりがパイズリをしようとしているのだと分かった。

彼がチラッと瑞穂に目をやれば、彼女は切なげな顔で見上げてきている。眼差しももの欲しそうで、本当は自分だって参加したいんだといたげである。だが、直登の

視線を受けるなり、彼女はそっぽを向いてしまった。

「早くやればいいじゃない……っ、こ、ここで逃げたりしたら、許さないわよ……っ」
それが本心でないことは察せられたものの、突き放すような言い方に、直登としては立場がない。

「わ、かった……よ」

とうとう彼は頷いてしまった。膝を曲げてペニスを降ろせば、みのりも待ちかねたように上体を反らせる。肉棒とバストの高さが合わせられ、たわんだブラ紐が丸っこい亀頭をまたいだ。次いで鈴口に蓋をする、若い美乳の張りど弾力。

「ふおっ!!」

みのりの肌はきめ細かいだけでなく、汗で濡れ、しかも芯から火照っていた。無節操な牡肉を、触れたところから蒸してしまおうとするようだ。

直登も膝が砕けかけ、咄嗟に脚の筋肉を収縮させる。左手も壁に当て、何とか身を支えた。

が、少年が止まっても、みのりの方は止まらない。自分の手で過剰に寄せた乳房の隙間へ、亀頭を、カリ首を、さらに竿までも、導いていこうとする。というより、過激な圧力で、無理やり押し込んでいく。

「くっ……あっ……あおっ！　みのりさんの胸っ……擦れ……る……!!」

手が緩まない分はバストが形を歪め、男根へ形を合わせようとしてくれた。が、それも最小限でしかなく、肉竿はのっけから押し潰されそうだ。

「直登君、声を出しちゃ駄目……。人に聞かれちゃうわよ？」

みのりは注意してくるが、むしろその蠱惑こわく的な声色が少年を悩ませる。彼女もわざとやっているのだろう。

固められた直登の脚は、今にも痙攣しそうだった。喘ぎだっつていつまでセーブできるか分からない。

やがて、乳房の下端が陰茎の付け根に届く。反対に上端からは亀頭が飛び出し、切っ先をみのりの細い顎へ突きつけた。そこへみのりの吐息がかぶさり、

「水着……直登君の手で脱がせてほしいの……」

「お……む……」

媚びるようなリクエストに、直登は右手を壁から離れた。ぎこちない指先でズレかけたブラを摘むと、熟れた桃の皮を剥ぐように、ゆっくりゆっくり持ち上げる。

布キレがなくなつて、乳房の変形ぶりは隅々まで露わになった。端正だった膨らみは、今や縦長に歪んで、肉棒をむっちり挟んでいる。その卑猥さとききたら、まるで元々

男を酔わせるためにある部位のよう。サーモンピンクの乳首も斜め上に尖り、直登を挑発して見える。

「……わたしの胸、気に入ってくれたかしら？」

「ああ……すごく……いいっ……」

「ふふっ、嬉しい……っ、わたしね……直登君にこうしてあげたいって思ってたの……。ううんっ……他にもたくさん……っ……」

「けど……っ、どうしてなんだ……っ!!」

いくら思い返しても、心当たりが全くない。みのりもはぐらかすように口の端を上げた。

「うふふっ、直登君ってば自分のかつこよさに気付いてないのね……っ」

直後、彼女の腰が浮き上がる。竿を押さえたのと同じ圧力、同じ体温が、今度は感じやすいカリの窪みをズリズリ逆撫でしていく。

（き、気持ちいい……っ!!）

みのりは巧みだった。巨乳の端から端までの広範囲をめいっぱい使って、牡の性感帯をなぞるのだ。上昇する間、ろくに息を吐くゆとりさえ与えてくれない。そして亀頭が抜けそうになると、またさっきの要領でバストを落としていく。

「みのりさんっ……俺……これじゃすぐに……イッて……くううっ!!」

滝の水さながらに押し寄せる柔肉の圧力に、少年は再びよろけかけた。そこを狙って、這い登る乳房が亀頭と竿の段差を摩擦。肉棒に添って絶えず変化し続ける姿も、これまたいやらしい。

「イッていいのよ……それだけ直登君が悦んでくれたってことだもの……っ」

上がって、下がって、上がって、下がって、上がって、下がって、上がって。

激しい動きを続けるうち、みのりの息も弾んでくる。それでも彼女はペニスへの奉仕を続行した。

バストの狭間で鈴口は浮き沈みを繰り返す。押されれば閉じて、引っ張られれば開いて、まるで溺れているかのよう。

そのイメージは、我慢汁が溢れてくると一層強められた。透明な液がみのりの白い肌を汚し、ニチャッ、ペチャッ！男根の周りで水音を奏で出したのだ。

「けどっ、俺は……ぐっ、むううっ！」

みのりがどう言ってくれるとしても、昇天の気構えはまだできていなかった。早漏と思われたくないし、瑞穂が近くにいるのも大きな理由。

直登は双子姉妹から目を背け、体勢を整えようとした。敢えて正面の壁だけを睨み、

愉悦を紛らわそうと試みる。

「ふふっ……うん、分かった……」

少年の頑なさに、みのりが往復を止めた。

彼女は乳房でペニス全体を覆い尽くすと、手の力を弱めたり強めたりし始める。子供をあやすようなその動き。汗ばんだ乳房にやんわり表面を揉まれると、ペニスもだんだん快感に慣れていく。強制的に精液を絞り取ろうとするのとは違う甘美なやり方に、少年も陶然となってきた。

「こ……このやり方……いい……っ……」

しかし、壁を見たまま息を吐いたところで、唐突に締めつけが強まり、動きも律動へ切り替わる。強烈な痺れも復活だ。

「お……イッ……イクっ!!」

堪らず大声を出しかけると、やり方はまた優しいものへ戻り。

「み……みの……り……さっ……」

「ああ……直登君の顔、気持ちよさそう……」

直登は完全に翻弄されていた。生半可な抵抗では到底太刀打ちできず、彼は美少女の目論むタイミングで射精させられるしかない自分を予感する。

しかし次の瞬間、彼の顔を瑞穂が両手で抱き寄せた。

「いぎっ……!!」

少年は首の筋が振れ、亀頭の側面も柔肉へモロに食い込まされる。痛みと肉悦に全身が引き攣りかけたが、それより早く、瑞穂の顔が飛び込むように近づいてきた。

「んむううふっ！」

くぐもった呻きと共に為される、想いの先走った口づけ。双子の妹はギユウギユウという擬音がピッタリのやり方で、ひたすら唇を押しつける。技巧もムードもあつたものではない。

直登が目を白黒させているうちに、彼女はバツと唇を遠ざけた。

「み……ずほ……っ!!」

「ふふっ、瑞穂ちゃんたらいきなりね……」

ステレオで声をかけられて、少女は泣きそうに顔をしかめた。

「分かっているから言わないで！ でも、もう見るだけじゃいやなの……っ！ あたしだつて直登が……す、す、好きなんだからあつ！」

およそ告白には向かないトイレの個室で、瑞穂は想いの丈を吐き出した。

他人に聞かれてしまうかもしれない心配と感情の爆発。その狭間にあつて、頬を一

筋の涙が伝う。

「瑞穂……！」

直登は反射的に、右腕を彼女へ巻きつけていた。裸同然の肢体を抱き締め、どこへ触れたかも確かめないまま、五本の指を捻じ曲げる。

「ひ、あ……!!」

瑞穂から悲鳴がこぼれた。

少年が掴んだのは、ショーツに包まれたヒップだった。適度な肉付きで盛り上がるそこは、乳房に似た手触りながら、もつとしなやかに締まっている。掌へもびったりフィットした。

「やつ、違うってばっ。あたしは触ってほしくて言っただんじゃなくて……って、そこお尻い……っ！」

瑞穂は声を潜めつつも、パニックへ陥ったかのように、豊かな胸を押しつけてくる。「直登君、そのまま瑞穂ちゃんを可愛がってあげてね」

みのりもそう告げてパイズリを再開。

「やあん……っ……瑞穂ちゃんへ触ったら……おちんちんがさつきより元気になったみたい……。直登君のお……浮気者っ」

みのりは嘸きながら、直登のものを扱き抜く。さらには舌を伸ばし、胸から飛び出す亀頭まで攻撃。

「はむっ……ちゆるっ……んっ……れろろっ！」

ヌルヌルの舌は、牡牯膜を叩き、時に鈴口へ引つ掛かつて、そこをこじ開けた。ズチュツ！ ヌチュツ！ ペロペロツ、グチュチュツ！

もう優しき重視の動きには戻ってくれそうにない。まるで二股少年に対する、彼女の可愛いお仕置きだ。

股間を突つ切る稲妻さながらの愉悦に、直登も歯止めが利かなかった。頭へ血が昇り、瑞穂の臀部でんぶを執拗にさすり始める。自分から瑞穂にキスをする。

「んぐっ……むうううっ！」

「ひ……んううっ……あうう……っ！」

指を蠢かせてみると、ショーツが邪魔だった。

「ぶはっ！」

口を離し、思いつくまま手を生地の内側へ押し込む。

直に触れた尻の表面は、なだらかながらも汗で湿って溶けかけているかのよう。水着も上から締めてきて、やっぱりスムーズに撫でるのは難しい。

だから、愛撫は揉みほぐす動きへ特化されていく。汗をまぶして、尻肉を柔らかくしていつて。まるでじつくり調理をするコックさながらの手付きだ。

瑞穂も意地を張っていた反動か、驚くほど感じやすくなっていた。

「あ、あんまりしないでおお……お尻なんて……恥ずかしいんだから……あ……」
首を横に振っているものの、もがくと直登に接する乳房が疼いてしまうらしい。そのせいで前屈みになり、胸も尻もますます少年へ差し出されるハメに。
直登の右手も元気づき、ついには人差し指が肛門までも探り当てた。

「ふやっ!! そこ……そこはやめてえ! んああ、触らないでえっ……!!」
瑞穂がいくら恥じらっても止まらない。

「悪いっ……。けどっ、俺、瑞穂に触っていたんだ……!!」

息を荒らげながら、少年は指の腹で尚も穴を圧迫する。

排泄のための場所は、周りをポポポヨした皮膚に囲まれつつ、僅かに盛り上がっていた。引つ掻いたら簡単に傷ついてしまいそう。現に押された薄皮は、簡単に凹んでしまう。もつとも、肝心の穴自体は硬くすぼまったまま、一筋縄ではいきそうにない。

「はっ……やうう……うっ! 駄目って……い、言ってるのにいつ! 汚い……からっ……あっ……んはあうっ!!」



遠吠えする牝犬さながら、瑞穂も背筋を反り返らせた。ここしばらくの間に、彼女の膣はこなれてきている。褻は異物を一層浅ましくしゃぶるようになり、それでいて膣壁のきつさと牡を蕩かす淫熱も健在だ。

「あつ……や、瑞穂ちゃんつ……わたしつ……助けえつ……えええつ！もおつ……熱いのがさつき、からつ……あつ!! ああああつ!! んあひいいいんつ!!」
「あああん！ これえつ……直登にされながらつ……あたしもつ……お、お姉ちゃんをイカせてるつ……みたいいいひつ!!」

断続的なオルガスムスで歪む姉の顔を間近に、瑞穂は嬉しそうな声で喘ぐ。その左手が股下をとおって、男女の結合部まで這い寄った。指先は躊躇なく、気遣いもなく、姉のクリトリスを捻りあげる。

「きゃひいいいんつ!! んああつ、みずつ……み、瑞穂つ……ちやあんうあああつ!!」
二人がかりへ戻った官能の波状攻撃に、みのりの膣肉ものたうった。開かれていた腿はバタついて、毛布を不規則に叩きだす。と、その脚が汗だくだった直登の腰へ絡みついて、ギユウッ!

少年を後ろから強く圧した。

「う、おっ!!」

亀頭から竿まで揉みくちやにされたところで、背後からも押し込まれ、直登はペニスガひしゃげそうだ。指先も抑制が利かなくなり、コリッと盛り上がる瑞穂のGスポットを引つ掻いてしまう。

「いひあああつ!!」

今度は瑞穂が悶えさせられる番だった。彼女はつんのめるのを堪えようとするものの、みのりが布地に食い込ませていた手を挙げてしがみつく。

「やっ……お姉……っ!!」

元々が不安定な四つん這いだった瑞穂だ。右手が上に滑り、巨乳も位置をずらして、その谷間をみのりの顔にかぶせてしまった。蠢いていた左掌は陰核から離れ、股の下から突き出たまま、姉の臍周りをまさぐり始める。

「ふぷっ……んっ……くっ……うはああむっ!」

子宮口を扶られ、唇を半ばふさがれながらも、みのりは抱きつくのを止めなかった。反撃、ではなく二人にすぎるしかない感極まった状態なのだろう。直登からは見えなものの、彼女は妹の乳房を吸い、続けざまにキスマークまで付け始めたらしい。

「うあうっ! 直登くうんっ! んあへああおっ! うあっひあっ……み……瑞穂ちやああう! んむぐっ! ひむうううっ!」

炎のような情動と止め処ない快楽を全身で表現し、それでも足りないといったげに、しゃくり上げるみのり。まぐわいを楽しむいつもとはまるで違い、幼児退行でも起こしたかのようだ。

アクメに憑かれた秘裂の蠢きに至っては、美少女にあるまじき飢えつぷりだった。ひたすら荒々しい。狂おしい。猛るペニスを隅から隅までしゃぶりまくる。

「んむうううっ！ すっ……きいいいっ！ ひぷっ……んむううふっ！」

「うおっ……ぐぐ！」

気圧されそうになる直登であったが、菌を食い縛って踏みとどまった。こうなったら最後まで付き合うだけだ。彼は驚きで縮み上がった瑞穂の秘所を拡張するように指をV字型へ広げ、左右へ回転させた。

さらに愛撫の離れたみのりのクリトリスも、瑞穂に代わって玩弄してやる。

クニユツ、クニユツ！

濡れた突起をダイヤルのように捻ったり、ビー玉へやるように弾いたり。前後の抽送をしにくくなった分を、陰核への指遣いで補った。とはいえ、腰を操るのも止めたわけではない。こっちは新たに上下左右の捻りを加えている。

「んはああっ！ 直登くっ……ううんっ！ やはああんっ、おマ○コっ……あつ、熱

すぎちやううんつ！　ちゅむつ、はふうむううつ！」

「なおおつ……とおつ！　ひつ……お姉ちゃあん！　そんな……吸いすぎいいつ！」

瑞穂ももがき始めていた。背筋にはブラの黒いストラップが食い込み、まるでSMのロープさながらだ。彼女は起きるに起きられず、振れそうな左腕をみのりの上で走らせる。やがて自らが押し潰している姉の巨乳を次の標的にしたらしい。彼女の肩とこの腕は、直登が見る前でせわしなく動きだした。

だが、よがったみのりも乳房を余計に吸い上げる。

「ふひいいいんつ！　瑞穂……ちゃあぶつ！　ふあつ……うえおおむ！」

瑞穂にとつては、姉を弄ることで、さらに自らを追い詰めてしまった格好だった。

織毛のごとき双子の媚肉も、ますます引き攣りだしている。ペニスと指の感覚を占領された直登は、喉元までせりあがってくる悦楽を吸収しきれず、みのりに続いて酸欠寸前に陥りそう。頭の中も融解寸前で、これ以上、腕と下腹へ力を入れ続けたら、神経という神経が振れてしまう。

しかし動けば危険と分かっているのに、刻一刻と追い詰められるこの瞬間が、少年には猛烈な快感の一部でもあった。

「好きだつ、大好きだつ！　瑞穂……つ！　みのりいいつ！」

尚も続けられる抽送に、重なった蜜壺は多量の愛液をかき出されていく。姉の汁は毛布へ染みを作り、妹の汁は女体に挟まれながら、どちらの肌へも満遍なく広がった。直登の鈴口も膣内で我慢汁を滴らせ、皮膚は後から後から粘つく汗を溢れさせている。のみならず、竿の底辺りではドロドロの子種までが量を増しつつあった。

スペルマはこっちも出せといわんばかりに、男根を中から圧迫し、押された海綿体は痺れながら、みのりの中でさらに硬くなっていく。そこを肉褻が寄ってたかって舐め直し、

「お……俺……えっ……出っ……るううっ！」

牡粘膜の焼け落ちそうな衝撃に、直登は顔をしかめた。怒鳴れば唾が飛んで、汗と一緒に瑞穂の赤い肌を汚す。

だが、止まる気になれないのは相変わらずだった。双子姉妹も少年の声が聞こえてくるのかいないのか、がむしゃらに身を躍らせる一方だ。

「いひっ……ひいっ……ひっ、んあああうっ！ 直登おっ！ 直登おおおっ！」

自分とみのりだけが聞くことを許されるあられもない声色で、瑞穂も達しかけているのだと、直登には分かった。

そしてみのりは今なお、イキっぱなしの状態。



「みず……ちやつ……あんくつ！ 直登つ……くつ……はううんつ！ あひうつ！
あおあおつ……ひつ、んひいいあつ！」

「くつ……おおおつ！」

少年は喚くような掛け声と共に、律動を熱くした。

すでに瑞穂が弱いと知っている場所を、Gスポットに限らず磨き上げ、バタ足さながら、二本の指を交互に走らせもする。

腰の方でも、引つ掛けられたみのりの脚を力任せに振りほどき、枷かせから放った肉棒を、子宮口から入り口まで突っ走らせた。そこでまたみのりに捕まって、最深部まで一気に押し込まれる。しかし、直登も負けずにまた下がった。後はもう暴力的な悦楽のせめぎ合いだ。

ジュブツッ！ スポツッ！ スポスポツッ！

「むううふつ！ んちゅつ、ちゅぶつ、はあああつ！ 直……くつ、んぶううあつ！
「直登おつ……あたしもおつ、お、おおおマ○コおつ、おかしくなってるううつ！
イクツ……イツちやうううつ！」

瑞穂の腰が前後に揺らぎ始めた。そのペースは少年の指と完璧に同調。おかげで直登も自前の獯猛さをそのままに、長いストロークで動けるようになる。

みのりはみのもりで、喘ぎの合間合間に口をふさがれ、荒波に揉まれる遭難者のようだ。

「イクウうつ！ またイツ……ふはつ……イクツ、またイクウうつ！ わたひ……イクのがあつ……んくつ、ふあうつ、と、止まらなくなつてるううつあああつ！」

もう誰が責めているとか、責められているとか、そんなの関係ない。三人は官能の極みへ向かつて、ただ相手を引きずるように疾走するのみだった。

そんな中、とうとう直登の巨根は白濁の重みに開かれる。限界だ、と感じた時にはもう、尿道が倍近い幅に広がっていた。

「出るっ！ 出すぞっ、みのりの中……で、出るううおおっ！」

持てる欲望を丸ごとぶつけ、少年はみのもりの子宮口を押し上げる。瑞穂の中で二本の指を振り回す。

「く……うああんうう!!」

「いあひいいいっ！」

双子も硬直し、膣内に居並ぶ無数の媚肉が、指へペニスへ押し寄せた。それらは最後の悪あがきのように、先を争って直登を舐め吸る。

「ふぐつ……!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!